

つくばで輝く研究者

YAMAGUCHI Taku 山口 拓さん

国立大学法人 筑波大学 体育系 助教



大阪府吹田市出身。2004年同志社大学総合政策科学研究科修了。修士(政策科学)の学位を取得。NPO法人ハートオブゴールドの初代事務所長としてカンボジアに赴任し「アンコールワット国際ハーフマラソン」を現地で運営する手助けやJICA草の根技術協力事業「小学校体育科教育支援事業」に従事。12年から筑波大学に勤務し「スポーツ国際開発学」共同専攻の設立メンバーとして専門家の育成にあたっている。

大阪府吹田市出身。2004年同志社大学総合政策科学研究科修了。修士(政策科学)の学位を取得。NPO法人ハートオブゴールドの初代事務所長としてカンボジアに赴任し「アンコールワット国際ハーフマラソン」を現地で運営する手助けやJICA草の根技術協力事業「小学校体育科教育支援事業」に従事。12年から筑波大学に勤務し「スポーツ国際開発学」共同専攻の設立メンバーとして専門家の育成にあたっている。

《平和で豊かな社会の実現を目指して》

「スポーツを通じて

開発(International Development through Sport=IDS)

は2000年に発表された国連のミレニアム開発目標(MDGs)にその有用性が示され、さらに15年には国連決議で「スポーツは持続可能な開発の重要な実現要因である」と表明されたことを機にその取り組みが加速。これまでの競技スポーツや生涯スポーツの域を超え、人間の尊厳や寛容、包摂、ほうせつなどの価値観を育むスポーツのソフトパワーを平和で安全な社会の実現に役立てようとする試みが促進され、スポーツ組織や国際支援組織のみならず民間企業や市民社会



学生のカンボジア現地実習の様子

スポーツを通して国内外の「持続可能な開発」を促進

組織などにも広がりを見せている。そんな中、スポーツを通しての開発を実践できる人材の育成を機としてアジアで初めて名乗りを上げたのが筑波大学。その創設メンバーとして12年7月に当時の赴任先だったカンボジアから帰国、国際社会で培ったIDGに関する15年の経験知を元に「スポーツを通じて開発の実践」と「スポーツが各開発課題に果たす役割」を研究し教育に生かしている。

《持ち前の行動力で理論と実践を積み重ねる》

父親からは「目の前のことだけでなく、10年先を見越して動くことを折に触れて伝えられ、環境問題などに見識があつた母親から勧められて参加したユニセフのサマースクールで途上国の現状を知った幼少期。いつしか得意だったスポーツを生かした社会貢献を志すようになり、持ち前の行動力を発揮して大学時代には自ら旅行時代に持ち込んだ「スポーツを通じて社会貢献

プログラム」を事業化し、卒業後にはカナダの私立校で体育教師に。ハンガリーでは公立高校で体育教師をしなからスポーツ行政に携わるなどの経験を経ながらも「自分の知識に限界を感じ、東ティモールとカンボジアでの活動を継続しながら大学院で政策科学を学びました。理論を実践に生かしてきましたが、最終的には豊かな生活を目指す現地の人々が生み出した文化こそが、この活動の鍵を握るという結論に至っています」。

つくばの生活

妻と中学生の長女との3人暮らし。コロナ禍を機にカンボジアから20年1月に長女が、10月に妻が帰国し9年ぶりに家族そろった生活を送る。「学術都市としてももちろん、四季が美しく、多様性のあるつくばは世界に誇れる街。特に子育てには適した環境だと感じています」。



趣味の旅行で南アフリカへ